

二松學舎 松苓会報



CONTENTS

- P2** 卒業生の皆さんへ
- P3** 第14回ホームカミングデー
- P6** 教壇を去られる先生方
- P7** 松苓会各支部活動
北海道支部・茨城県支部・群馬県支部・東京都支部・
神奈川県支部・長野県支部・三重県支部・宮崎県支部
- P13** 北から南から
- P14** 大学だより
- P17** 国際政治経済学部創設時の沼南教務課・学生課
- P18** 恩師からの便り 卒業生だより 会員からの便り
- P22** 学生会員だより
- P24** 『戦後日本の国語教育—二松學舎に学んだ沖山光の軌跡』紹介
寄付者芳名 訃報 編集後記

卒業生の皆さんへ



二松學舎松苓会
会長
廣田 克己

「ご卒業おめでとうございます。」
「二松學舎松苓会」は皆さんを正会員として歓迎いたします。

「松苓会」は専門学校1期生の卒業とともに昭和6年に創設されてから今年で86年目になり、会員数は約3万人です。全国47都道府県に支部を持ち、先輩たちは世界中の様々な分野で活躍しています。また本年度、学生会員が規約上に正式に位置づけられ、在学生も学生会員として松苓会活動に直接関わることができるようになりました。これは今後同期会という形で松苓会組織の横糸と言わなければならない、従来の支部活動を縦糸とする、より充実した組織へと発展するものと考えています。

さて、皆さんが卒業して最初にすることは、保護者の皆さんに感謝の気持ちを伝えるということです。大学進学が当たり前の時代とはいえ、生まれてから今日に至るまでの子育ては並大抵ではなかったはずです。

皆さんがやがて子育てをする年齢になった時に知ることになるでしょう。子供を育て上げることは、人生の一大事業です。その保護者の皆さんが今日、節目を迎えたのです。最も祝いの言葉を受けるべきは保護者の皆さんだと思います。

次に皆さんがすべきことは、これから飛び込んでいく場所です。自分の居場所を一日も早く作ることで、新人の居場所は与えられるものではなく、自分で作るものです。また家庭人、社会人としてのポジションも大切です。これまで学び、考え、実践してきた知恵を大いに駆使してください。

最後に、いよいよ皆さんの自力の航海が始まります。当分は余裕などないと思います。社会人としての基盤づくりに全力を尽くしてください。そして、余裕ができたら帰ってきてください。「松苓会」はいつでも皆さんを待っています。「ホームカミングデー」「名刺交換会」や各支部主催の総会、文学散歩、賀詞交歓会、また折に触れて実施される「同期会」「ゼミ会」「サークル会」等に顔を出してください。恩師や学友、先輩・後輩たちとの語らいは、きっと明日からの力になると思います。どうぞ身体に気をつけて、たくましく生きてください。



二松學舎大学
学長
菅原 淳子

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。在学中の数々の思い出を胸に、二松学舎大学を巣立ち、新たな人生の扉を開こうとしていらっしゃる皆さん。皆さんは目の前にある様々な可能性を持った道を選ぶことも、また自ら道を切り拓いていくこともできるのです。どうぞ自信を持って新たな一歩を踏み出していただきたいと思います。

社会人となった時に、皆さんは大学で学んだ専門知識を必ずしも生かすことができないかもしれません。しかし、身につけた考え方や学びの技術を生かすことによって様々な分野で活躍することは可能です。皆さんがこれから生きていく時代は、変化の激しい時代、人工知能（AI）やロボット技術等を軸とする第4次産業革命の時代とも言われています。情報が溢れ環境が急速に変化する社会に、柔軟に対応できる能力が必要とされていますが、皆さんどう

ぞ安心してください。在学中に学んだ専門的な知識はもとより、分野の枠を超えて身に付けた幅広い教養や知識によって、皆さんには高い汎用能力が備わっていると確信しています。また、サークルやアルバイト、あるいはボランティアなどの社会活動を通じて広げた視野や人間関係。それらの一つ一つが、これからの皆さんの人生の中で貴重な経験として必ず生きてくることでしょう。皆さんが社会人としての自覚と責任を持って、社会に貢献してください。

皆さんにとって、大学を卒業することは大学での学業の終了を意味しますが、決して学びの終了ではありません。未来は常に未知数であると考ええると、人間は生涯学び続けねばならないと思います。卒業後の長い人生では、絶え間ないインプットとしてアウトプットが求められるでしょう。皆さん、どうぞ変化を恐れることなく、常に新たな知識を取り入れてください。

たくさんの方の可能性を持っていらっしゃる皆さんの前途が希望に満ちあふれたものであることを祈って、皆さんに贈る言葉と致します。

第14回 二松學舎大学ホームカミングデー

平成30年11月3日（土）、二松學舎大学と松苓会の共催で第14回二松學舎大学ホームカミングデーを午前10時から開催致しました。

卒業生の皆さまに、在学生の活躍する姿や大学施設、学園祭の様子を知っていただきたいとの思いから、例年、創縁祭（学園祭）の時期にあわせて実施しております。

今年度は、「二松學舎大学への愛校心を高めてもらい、教職員や現役学生と交流の場にしたいだく」をテーマに、実行委員で様々なイベント案を企画しました。

当日は、九段2号館のラーニング・コモンズをホームカミングデーの会場として、「公開講座」や、本学の公式キャラクター『ねこ松』が描かれたランチバックを景品とした「スタンプリ」等の来場者参加型イベントを実施したほか、「一年後の自分への手紙コーナー」や「一言ノートコーナー」、創立百四十周年記念映像の放映や漢学塾時代の校舎を再現した模型展示、ねこ松の登場など盛りだくさんの内容で卒業生の皆さまをお迎えしました。

また、漱石アンドロイドサークルと落語研究会がコラボレーションして行った漱石アンドロイド関連イベントもご案内し、現在大学で取り組んでいる研究や活動をご覧いただきました。

さらに、九段1号館1階では、ホームカミングデー前日から「卒業生作品展」を開催。書や写真など35点の出品があり、こちらも多くの来場者でにぎわいました。

中でも特に好評を博したのは、昨年、勤続40年を迎えられた磯水絵・山崎正伸両文学部教授を講師に迎えて実施した公開講座「学生の頃を思い出して、講義を受けに来ませんか？」です。いずれの回も定員を大きく上回り、以前と変わらずに講義をされるお二人の姿を前に、真剣ながらも嬉しそうな表情で講義を受けられる参加の皆さまの姿が印象的でした。講座後は、講師の先生方との親睦会を実施。懐かしいひと時を過ごされていたようです。

会場も新たに、参加型イベントを中心に実施した今年度のホームカミングデー。次回（平成31年度）も母校の魅力を再発見していただけるようなイベントを企画してまいりますので、是非ご参加いただければと思います。

（実行委員 広報課 越後屋かおり）

会場あれこれ



受付の様子



会場となった九段2号館



大学グッズも販売



内装は落ち着いた雰囲気



今年のはぼりも立てたニャ！

卒業生からの メッセージ

懐かしさと新たな出会い

阿部美咲（文81）

磯水絵先生の公開講座に参加させていただきました。大学を卒業してから6年が経ちますが、かつてのまなびやで恩師の講義を受けられる機会に恵まれたことを大変嬉しく思います。

講義は、「鴨長明は『方丈記』をなぜ書いたのか。」と題しまして、長明の生涯に触れながら、彼が著した『方丈記』についてお話ししていただきました。磯先生とともに古典の世界を味わい、考えを深めていく時間はただただ楽しくて、このような時間を当たり前のように過ごしていた学生時代がとても贅沢で貴重なものであったと改めて気付かされました。たくさんの方を学び、自分の世界を広げることに喜びを感じていたあの頃の気持ちに返ることができました。

講座後には、磯ゼミナール出身者が一堂に会して思い出話に花を咲かせました。勤続40年を迎えられました磯先生のゼミナールでありますので、在学時期はバラバラなのですが、ゼミ合宿での苦労話など世代をこえた共通点に盛り上がり、笑いの絶えない時間を過ごしました。

ホームカミングデーに参加して、過去を懐かしむだけでなく、新たに

得るものがありました。学生時代とは違った出会いを求めて多くの方に参加して欲しいと思います。



磯教授の講義（右）、親睦会（左）

青春時代の二松の面影

三村昌子（文65）

いつもの私なら……躊躇していたが、今回のホームカミングデーの案内通知には学び舎へ足を運ばせる十分な理由があった。

勤続40年を迎えられた正伸先生の公開講座がある――。同期のゼミ仲間、声を掛け、一緒に参加することになった。

通っていた頃とはすっかり様変わりした校舎。ガラス張りの明るい配色のテーブルや椅子が置かれた控室。古びた大教室で講義を受けていた私にとっては、それだけでも緊張。いよいよ正伸先生の講義が始まる。満員御礼状態だ。先生が学生時代の卒論にと研究されていた大和物語の世界。私たちが学んでいた頃と少しも変わらない、先生の流れるような範読。根拠となる資料を順序立てて、絡んでいる糸ののやもやをほどこうように並べていくと、また新たな疑問や見立ての扉が開く。あつという間の45分。（思考回路の体感的には90分?）

講義後は先生を交えてあちらこちらで思い出話の花畑。そのまま建物探訪へ。見た目こそ硬質な建物だが、各階案内や教室入口では手作りの揭示物が迎えてくれる。その心配りと活気ある後輩のみなさんの姿に、居心地のよかった私の知っている二松の面影を見つけることができた。

これから歩いていく道のりで、た

ぶんずつと好きだろうなと思える文学や書、温かい先生方や仲間……。あらためて刺激や励ましを受け、かみしめながら帰路につく私であった。



山崎教授の講義（右）、親睦会（左）

ねこ松とめぐる 第14回ホームカミングデー ギャラリーツアー

【卒業生作品展】

卒業生の皆さんの
力作ぞろいニャ！



九段1号館11階の会場内



【スタンプラリー】

吾輩のイラストの
スタンプニャ～



【コーナー色々】

みんな書いてくれ
たかニャ？



▼一言ノート

▲1年後の自分に
手紙を書こう



【漱石アンドロイドと落語研究会】

模擬店や展示、
発表がいっぱいで
楽しいニャ！



▲文学部 中川桂教授による解説



▲落語について語る漱石アンドロイド



▲落語研究会部員による落語の実演

【創縁祭の賑わい】



教壇を去られる先生方

本年3月で文学部渡邊了好教授、多田一臣特別招聘教授、国際政治経済学部菅原淳子教授、星敏雄教授が定年退職されます。各教授に定年にあたっての思いを御執筆願ったところ、次の3名の教授から玉稿を頂きました。

二松學舎卒業生・在学生の皆さんへ



渡邊了好 若い皆さんに退職を迎えて今思っていることを述べたいと思います。それは

進路の決め方についてです。私が二松學舎大学で30年もつとめることができたのは時代の偶然のおかげです。大学に入った頃の私は中国留学を目指して中国語を勉強していました。ところが文化大革命の進行につれて留学は不透明になって行きました。そんな頃、偶然、韓国のラジオのニュースを聞いたのです。ニュースを伝える女性のアナウンサーの声を聞いた時、なんと美しい言葉だろうと心を奪われて、すぐ朝鮮語(当時)を始めました。1960年代のことです。大学に朝鮮語学科があるのは天理大学だけの時代ですから大学の教員を目指したわけではありません。国文科の大学院にいながら明けても暮れても朝鮮語を学ぶ私の目標は日本一の朝鮮語使いになることでした。それでも韓国留学直前に一瞬の迷いがありました。日本に帰って

来た時仕事が無かつたらどうしよう?という想いが頭をかすめたのです。そんな時、迷いを吹き飛ばしてくれたのがアマチュア天文観測者で関彗星を発見した関勉さんでした。関さんは「あなたのようになりた

い」というファンの青年に「できないのは困るならお止めなさい。できないかもしれないから。できなくて良いならおやりなさい。できるかもしれないから」と答えていたので。私は70年代半ば、延世大学に留学しました。当時の韓国は、デモに次ぐデモ、釜山、馬山の暴動から大統領の暗殺と動乱の時代でしたが20代の私には生きているという実感のある青春そのものでした。韓国の大学に就職して10年以上が過ぎた頃ソウルオリンピックの開催が決まりました。二松學舎大学でも日本語教員養成課程、韓国語、日韓対照言語学を開講することになったのです。韓国語はともかく、日韓対照言語学などで論文を書いている人は減多にいる時代ではありません。私が二松學舎のお世話になったのは時代の偶然によるのですが、「できなくても良いならおやりなさい。できるかもしれないから」という関さんの言葉の

おかげだと私は思っています。

成蹊大学日本文学科卒業。同大学大学院、延世大学大学院修了。仁荷大学日本文学科助教授を経て昭和63年二松學舎大学へ

退職の弁



多田一臣 二松學舎大学には、ちょうど5年間お世話になりました。特別招聘教授とい

う肩書は何だか偉そうですが、特権も何もなく、他の先生方と分け隔てなく扱っていただけたことは、むしろ幸いでした。5年間の長い短い、いまはそのどちらでもあるように感じています。まだ余力のあるうちに退職するのは、やはりよいことではないかと思っております。

学生諸君とのことで印象深いのは、ゼミ合宿でしょうか。大学の規定では、合宿地は関東周辺に限るということなのですが、古代文学の舞台はどうしても関西圏になるので、合宿はそこでさせてもらいました。最初の年は伊勢にしましたが、翌年からは奈良方面に切り替えました。山辺の道を歩いて、桜井市のペンションに泊まり、翌日は明日香を周遊しました。9月の合宿期間はちょうど台風の時期で、天気の良いものが多く、レンタサイクルを予約したものの、最終年を除いては、すべ

て徒歩で回るようになりました。もともと、私がいちばんの健脚らしく、近年の学生諸君の体力低下(?)を実感したことでした。とはいえ、事故もなく、無事に歩き通せたのは、何よりのことでした。

桜井市のペンションは、御主人が著名な郷土史家の方で、最初の年は、夜、蘊蓄を傾けたお話をうかがうことができたのですが、ご高齢のため、2年目からそれがなくなってしまうたのは、返す返すも残念なことでした。ある年、台風が関西を直撃するという報道があり、状況問い合わせの電話を大学からもいただいたことがあったのですが、御主人の言によると、明日香は昔から台風の直撃のまっすぐな土地だとのこと、事実、その通りになったのには驚きました。明日香宮が営まれた理由もそうしたところにあつたのか、ということであらためて認識したような次第です。合宿のお蔭で、学生諸君と普段はできない話が出来たこともよい思い出になりました。

二松學舎大学の今後のますますの御発展をお祈り申し上げます。

東京大学文学部卒業、同大学大学院修士課程修了。東京大学助手、千葉大学助教授、東京大学教授、埼玉学園大学特任教授を経て、平成26年、二松學舎大学文学部特別招聘教授に就任。

教育改革のバトンを新学長に

菅原淳子



長いこと文学部だけの単科大学だった二松學舎大学が、新たに国際政治経済学部を開設したのは平成3年だった。平成元年に戦後の東西陣営間の冷戦が終焉し、世界ではグローバル化が一挙に進んだ。本学も新学部を設置することで、国際的に活躍できる人材の育成に乗り出し、当時津田塾大学文学部国際関係学科の助手をしていた私は、新学部で「西洋政治史」「国際関係論」を担当する教員として平成4年に着任した。

本学が「国漢の二松學舎」と呼ばれたことを知っていた父は、私の就職をととても喜んでくれた。というのも父の母方の祖父が旧制萩中学の国語漢文科の教員で、漢学者でもあったからである。不思議なご縁を頂いたと思う。

新学部の設置が沼南（現柏）校舎だったことから、平成16年に九段校舎が新しくなるまで授業は柏で行われた。4期生が卒業写真の撮影に、一番思い出深い場所「スクールバスの車中」を選んだことを思うと、今も笑ってしまう。

平成11年、私は国際交流センター長に任じられた。当時北京大学での夏季中国語研修は始まっていたが、

海外協定校は未だなく、私の役割は本学のグローバル化の推進と、海外の高等教育機関等との学術・文化交流の推進だった。4年間の任期中に北京大学を初め5大学と交流協定を結び、学生の交換留学も始まった。

平成15年以降、私はハラスメント防止委員長、附属図書館長そして平成23年から国際政治経済学部長、27年から31年3月まで学長を務めた。学長時代に創立40周年を迎え、両学部での新学科開設を実現できたことは忘れられない。しかしまさにこの時期、日本社会は構造的な変化に直面し、18歳人口の急激な減少は大学にも大きく影響を与えることになった。ユニバーサル時代と言われる今日、大学に求められているのは、いかに学生に必要な学力を身に付けさせて社会に送り出すかである。本学も質の高い教育を提供しつつ、教員の教育力の向上が必須となっている。このような時期であるが、教育改革のバトンは次期学長を初め若い先生方に渡し、私は本学の一層の発展を見守りたいと思う。

昭和59年津田塾大学大学院国際関係学研究科博士課程単位取得満期退学、同62年同大学文学部国際関係学学科研究助手。平成4年二松學舎大学国際政治経済学部助教授、同8年教授。国際交流センター長、附属図書館長、国際政治経済学部長（兼研究科長）を歴任。平成27年4月学長に就任。

松苓会各支部活動報告

〈出席・参加者欄は敬称略〉

北海道支部

◆平成31年支部新年会

事務局長 若松顕仁

昨年9月に発生した「北海道胆振東部地震」では、全国の皆さんから温かいご支援と励ましをいただきました。誠にありがとうございます。まずもって御礼申し上げます。震度6の大地震、また直後から全道で停電「ブラックアウト」が数日続きました。広い北海道、揺れのほとんどなかった地域もありましたが、つくづく電気のありがたさを痛感した数日間でした。

現在もオール北海道で復興に努めており、二松學舎の同窓生も全道各地で頑張っています。

北海道の冬は、雪と氷と寒さとの戦いであります。空の玄関口、新千歳空港が吹雪のため混乱したほんの数日後、吹雪の



札幌市・「旬海鮮すすきの屋」にて

合間をぬったように、平成31年1月9日（水）、北海道支部の新年会が札幌市中央区「旬海鮮すすきの屋」で開催されました。参加者は、昨年よりも多い11名。札幌市・千歳市のほか、南は函館市から北はオホーツク管内興部町・清里町まで、走行距離にして実に60キロに及ぶ広範囲の地域から会員が集結しました。

佐賀副支部長の挨拶のあと、前支部長の奥村氏による乾杯で開会し、美味しい料理に舌鼓を打ちながら、参加者一人ひとりから「近況や今年の抱負」を語っていただきました。「卓話」という形式だったものではなく、ざつくばらんに会話のネタとして……というもので、今後また若い会員や初めての参加者が増えたと、その雰囲気づくりに良いのかなと考えます。もちろん参加者を増やす方策・努力は第一課題ですが。

さて、今年も山崎前事務局長のお計らいで、二松學舎「論語カレンダ―」が参加者に配られました。これを楽しみに新年会に参加される方もいるとか。こういう「お年玉」もありますので、ぜひ皆様には奮ってご参加くださればと願う次第です（新事務局長からの「お年玉」もあります笑）。また北海道外在住の方でも、

里帰りや出張、旅行中など時期が合いましたら、ぜひご参加いただければと思います。事務局までご一報ください。支部一同、熱烈歓迎いたします。

本年も北海道支部の活動にご理解ご協力くださいますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

〈参加者〉

奥村悠二郎(文36) 安部初雄(文42)
不動和則(文43) 佐賀敦司(文49)
荒井 到(文51) 工藤昌彦(文56)
若松顕仁(文56) 吉川 肇(文59)
吉川真理絵(文60) 富永貴之(文65)
佐々木伸(文74)

◆道南分会総会

北海道支部道南分会の総会が10月6日(土)函館市において行われました。参加者は支部役員を含め8名。支部からは、8月の支部総会にて就任した函館出身の佐賀敦司副支部長、同じく新事務局局長に就いた若松が出席しました。

当日はあいにくの台風25号が接近中。幸いそれほど激しい天候にはならなかったのは、嵐に立ち向かう(と)いうか勝つてしま(う)道南支部の皆さんの下根性の賜物と、感服したのであります。

会場は五稜郭「寿司料理 谷ふじ」。美味しい料理に舌鼓を打ちながら、和やかに談笑が進みました。久しぶりのご参加という佐藤新平氏は昭和34年度の卒業アルバムを持参され、懐かしい写真と思い出話に一

同盛り上がりしました。また開原正信さんから、は学生当



函館市・「寿司料理 谷ふじ」にて

時、リーキ

ンで「し

唄」とい

ものを歌

たんだが

というお

話。どなた

かご存知の方

ご一報くだ

さい。

二次会

は同じく

五稜郭の

スナック

「青りんご」

で怒涛の

カラオケ

大会。

者は澤向分会長はじめ6名。支部からは今年度新任の佐賀敦司副支部長・事務局



釧路市・「ふく亭本店」にて

局長若松が出席しまし

た。

会場は

釧路市栄

町「ふく亭

本店」。

一階エント

ランスの池

では、

タラバや花

咲・毛ガニ

がお客様を

お

迎えします。

毎

回ご参加

の伊藤ご

夫妻のお

孫さ

んがバド

ミントン

選手とし

て活躍さ

れている

話題や、

末廣さん

の娘さん

の進路相

談など、

会員の近

況報告で

盛り上がり

しましたが

、気が付け

ば開

会から2時

間。店員は

「特に制限

は(飲み放

題も)聞いて

ません」と

のこと。

「ふく亭」

さんに心

から感謝

申し上げ

、来年の

総会も同

店で開催

することを

全会一致

で決議し

たので

した。

結局「ふ

く亭」に

4時間も

いた我々

の二次会

(三次会

?)は、や

はりい

つもの「

つぶ焼

かど屋」

にて焼

きたた

てツブを

堪能し、

釧路の夜

(美川憲

一)は更

けていく

のであり

ました。

(参加者)

伊藤正彦

(文34) 伊

藤久美子

(文34)

澤向 崇

(文39)

末廣勇人

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

(文60)

ら、今年は支部役員で除草作業に取り組みました。景勝地に立地し作業後の懇親を図ることもできるので、今後は支部会員に広く呼びかけ支部事業として継続することが提案されました。また、顧問の大地武雄先生から、第24回二松學舎大学教育研究大会概要が報告されました。

総会終了後は、食事をとりながらの懇親会となり、参加者一人ひとりの近況報告もあり和やかな一時となりました。席上、案内を差し上げた音楽家のマシコタツロウさんから寄せられたメッセージの紹介もあつて、県内出身者や県内で活躍している会員が話題となりました。中でも社会人落語日本一、落語国際大会優勝の二松亭ちゃんべい（斎須博）さんには、是非支部懇親会に参加して頂きたいと参加者の期待が寄せられました。懇親会は楽しい雰囲気の中、午後7時に来年の再会を期して閉会しました。

余談になりますが、平成30年12月22日（土）高萩市中央公民館主催の行事で二松亭ちゃんべいさんが「芝浜」を熱演され、お客さんはみな引き込まれるように聴き入っていました。さすがの話術と感動を覚えまして、今後のますますのご活躍を期待しております。

（参加者）

来賓 小林公雄松苓会幹事長（文38）

支部会員

大地武雄（博10）金 甲順（文36）

群馬県支部

◆朔太郎再評価と浦野先生墓参 群馬県支部文学散歩

「学長のお墓参りをしていないね」。こんな一言から、元学長浦野匡彦先生の墓参をメインとした文学散歩を企画しました。

平成30年10月27日、秋晴れのもと、本部、神奈川県支部、東京都支部からも計8名が参加。計17名は前橋市街を散策。前橋文学館で朔太郎の功績を再評価し、泉下に眠る浦野先生の奥津城へと歩を進めることに。

本学中興の祖として高く頌される先生です

が、われわれ群馬県民にとつては「上毛かるたの生みの親」として広く知られています。ご長女の西片恭子刀自は「白百合とコスモス



前橋市亀泉霊園・浦野匡彦先生墓前にて

が好きだったのよ。皆さんが詣でてくださいと、父も喜んでいますよ」と言葉をくださった。そのとおりに墓前には既に白百合が出迎えてくれ、先生が「よく来たねえ」と言っているようでした。参加者はそれぞれに謝意を伝え現在の姿を報告。「一度お墓参りをしたかった」の声を耳にすると、今回の企画を担当して良かったなど感じました。

その夕刻からの懇親会はとても睦深いものとなりました。附属高校校長時代の先生の写真も見せていただき、なごやかにかつ、學舎への思いを改めて深める日となりました。

（参加者）

松苓会本部

廣田克己（文38）山崎正伸（文41）

小林公雄（文38）

神奈川県支部

小林孝彰（文38）平野光治（文40）

東京都支部

畠山幸治（文37）星野優子（文42）

大山由美子（文47）

群馬県支部

新井喜義（文37）金井 俊（文38）

小石さち子（文47）高柳 薫（文47）

佐藤 桂（文50）金田仁志（文53）

林 恒徳（文60）西牧秀敏（文62）

大井田琴（文85）

◆支部総会

支部長 小石さち子

平成31年1月19日（土）ヴィラ・デ・マリアー・ジュ高崎において総会・新年会が行われました。松苓会本部か

ら木村誠次監事をお迎えし、17名の会員の参加により総勢19名で午後2時から総会が始まりました。

総会は、小石支部長の挨拶に始まり、来賓として松苓会監事木村誠次様からご挨拶を賜りました。木村さんが高校生の時の校長が故浦野匡彦氏であり、大学進学後は浦野先生が理事長であり、その後の関係等も含め貴重なお話を聞かせて頂きました。また、群馬県支部の諸活動について評価を頂き、他支部の模範となる活動を期待されました。

議事は新支部長に高柳薫氏（文47）選出を含め全て承認され、総会は約40分間で終了しました。

その後の講演会では、講師渡邊俊さんより「KING OF JMK」大人達の上毛カルタ日本一決定戦」と題してお話を伺いました。

渡邊氏は群馬県安中市生まれ、横浜国立大学卒業、日産自動車（株）

の世界のマーケティングリーダー部門に勤め、2012年にマーケティングインテグレーションサル事務所設立。17年に一般財団法人「KING OF



高崎市「ヴィラ・デ・マリアー・ジュ高崎」にて

JMK」を設立。

「群馬」が好きで群馬出身の東京モンが群馬の為に何かアピールする力になれないかと、70年の歴史を持つ上毛かるたで、日本一を決める大会を開催すれば「群馬」を知ってもらえる。3回目以降は板橋区文化会館で実施するも手狭になる程、参加者が集まるとの事。

今後上毛かるたを使い日本中の方に「群馬」を知ってもらい観光に来てもらえるようなしかけ作りを考えていきたい。と話され、会場は拍手喝采でした。

質疑応答では、二松學舎大学、同附属高等学校において会場の提供が可能か提案がありました。

講演会後の新年会は各自から近況報告等をいただきました。

〈参加者〉

来賓 本部監事 木村誠次(文39)
深澤賢治(文37) 都丸弥生(文47)
宮森庸子(文56) 新井喜義(文37)
金澤正教(文50) 林 恒徳(文60)
池田ふみ子(文37) 佐藤 桂(文50)
西牧秀敏(文62) 金井 俊(文38)
金田仁志(文53) 細矢佳稔(文68)
高柳 薫(文47) 勅使河原覚(文53)
田村 琴(文85) 小石さち子(文47)
篠原真美子(文56)

◆第8回群馬松苓会展

期日 平成31年2月1日～2月6日
会場 高崎シティギャラリー

出品者 12名

来場者 290名

東京都支部

◆歴史文学散歩

支部長 矢澤喜成

「芭蕉を偲ぶ下町・江戸散策」

平成30年10月6日(土)

星野優子副支部長中心の企画で好評を博してきた女子会企画行事も5回目を区切りとして、歴史文学散歩を復活させようという運びとなり、今回は高橋映子常任幹事に企画を御願ひした。汗ばむ陽気の午後一時半、清澄白河駅に集合。廣田克己松苓会長を始め、本部よりの御参加、平野光治支部長を始め、神奈川支部よりの御参加、特別参加の方を含め、参加者21名。高橋さんが用意された深川カトレアの元祖カレパンと、芭蕉の旅姿が焼き印された特注の銅鑼焼を美味しく戴く。

片山聖英幹事長の解説で、滝沢馬琴誕生の地から、蕉門十哲の一人杉山杉風の別墅採茶庵跡へ。採茶庵は芭蕉が『奥の細道』の旅立ちの為に移り住んだ処で、その狭さに驚く。次いで紀伊国屋文左衛門の墓、松平



定信が眠る
靈巖寺、村
田春海の墓
(本誓寺)、
墨直しの碑
等芭蕉所縁
の臨川寺、
深川芭蕉庵
旧地の芭蕉
稲荷神社
へ。「婦る
池や」の句
碑は芭蕉の
筆蹟ならん。更に小名木川の芭蕉庵
史跡展望庭園で芭蕉翁之像を囲んで
記念撮影後、芭蕉記念館を抜けて、
喫茶店とコインランドリーを併設す
る喫茶ランドリーで休憩。



芭蕉庵史跡展望庭園にて

後半は、初音森神社から、塩原橋(堅川)を渡り、夏目漱石が教師をしていた江東義塾跡、討ち入りには人数不足乍ら吉良邸跡へ。更に『杜子春』の一節が刻まれた芥川龍之介文学碑(両国小学校)、西郷隆盛揮毫の勝海舟生誕之地碑、旧国技館の大鉄傘跡、殿村藍田の屏風や、鼠小僧次郎吉・竹本義太夫・山東京伝・加藤千蔭の墓・振袖火事供養塔等のある回向院と巡る。片山さんの委細を尽くした解説に皆終始聞き入っていた。最後は両国ビューホテル日本料理さくら亭で、俳優の水島涼太さんも加わり、大いに盛り上がった。

◆支部報発行

○第65号 平成31年1月1日発行

神奈川県支部

◆文学歴史探訪

事務局長 小林孝彰

・恭頌新禧
・新年に「一途さ」を想う 矢澤喜成
・芭蕉と江戸散策 井上和男
・千葉県支部総会報告 高柳幸雄
・神奈川県支部総会と歴史文学探訪
・群馬県支部文学歴史探訪
・試行錯誤の中で走る日々 荒屋陽子

神奈川県支部は横浜・川崎・県央・県西・湘南・三浦の6支部からなり6年ごとに賀詞交歓会や文学歴史探訪を担当します。本年は私の住む川崎です。地形的に多摩丘陵と多摩川下流平野からなる県北東部に位置します。今回は多摩川を越えた東京都大田区となる「馬込文士村」を探訪場所としました。大田区馬込・山王・中央の地域は大正時代末期から昭和時代初期にかけて多くの文筆家や画家・書家が居住、互いに交流しながら芸術活動を展開しました。この場所を後に人々は「馬込文士村」と呼ぶようになりました。

平成30年11月11日(日)JR川崎駅に集合、快晴の天気恵まれ路線バスに乗り六郷から多摩川を超え都内に、第二京浜国道を走り都営馬込駅で東京支部からの参加者と合流し総勢17名で約4キロ4時間のコースをスタートしました。最初に向かつ

たのは現代女流かな書の第一人者、熊谷恒子記念館で展示作品を見学、そこから起伏のある道のです。三越デパート天女像の制作者佐藤朝山や劇作家真船豊、画家小林古径や作家室生犀星、山本周五郎らの居宅跡の碑を目にしながらか萬福寺に到着。ここは鎌倉幕府源頼朝の重臣梶原景時の創建、平家物語の名場面「宇治川の合戦」で先陣を争う嫡男梶原源太景季が乗る名馬磨墨の像があります（馬込の地名は名馬を産する谷地を起源と伝われます）。山王草記念館は明治、大正、昭和にオピニオンリーダーとして活躍した徳富蘇峰旧宅跡で蔵書や書簡が展示、尾崎士郎記念館は文士村の中心人物として活躍した小説家居宅、ジャーマン通りを歩き大森駅向かい天祖神社階段に当時の様子を描いたレリーフを見学後昼食となり各人が世代を超えた交流を深め、昼食後に日本の考古学発祥の地となる大森貝塚碑へ向かいました。既に時刻は15時半、JR大森駅に戻り解散となりました。



熊谷恒子記念館前にて

て開発され、多くの人々が移住、文学的環境として適した場所であったのでしよう。又この時期いずれの文士も影響を受けたプロレタリア文学隆盛期にも当たり、互いに寄り添い庇護し合う時代に、酒・おしゃべり・麻雀・ダンス・恋愛と賑やかで笑いに充ちた生活が繰り広げられた歴史を肌で感じた一日となりました。※今回ガイド役を地元で詳しい矢澤喜成東京都支部長にお願いし解説に花を添えていただきました、改めて御礼申し上げます

〈参加者〉

本部

廣田克己 (文38) 小林公雄 (文38)

神奈川県支部

松丸由文 (文31) 浅居美智子 (文33)

小林孝彰 (文38) 平野光治 (文40)

藤井隆晴 (文47) 網野将美 (文64)

渡辺憲一朗 (文80) 鈴木久子 (賛)

東京都支部

生垣有喜 (文38) 家永修 (文44)

矢澤喜成 (文50) 片山聖英 (文50)

荒屋陽子 (文85) 玉井賢司 (特)

◆新年賀詞交歓会

支部長 平野光治

平成31年1月27日(日) 横浜崎陽軒にて、平成31年二松學舎松苓会神奈川県支部賀詞交歓会が開催されました。

松苓会本部小林公雄幹事長、東京都支部矢澤喜成支部長をお迎えし、支部会員等17名を含め、19名の参加となりました。中川俊一郎



横浜崎陽軒本店にて

副支部長による開会挨拶、支部長挨拶後、小林幹事長、矢澤支部長より、ご挨拶をいただきました。廣田克己本部会長・支部顧問による乾杯後、美酒・料理を味わい、ご参加いただいた皆様からご挨拶並びに近況報告をいただきました。「生きる意志」「退職後の生き方」「終活」「学ぶ姿勢」「母校愛」「夫婦愛」と話題豊かで、例年とは一味違う賀詞交歓会となりました。開会前に總持寺に初詣を行い、石原裕次郎のお墓参り、托鉢に出るためのお祈りに触れ、修行僧の案内による拝観等心に残る新年のスタートを切る事が出来ました。ご参加の皆様の様子に触れ、感慨深く、感謝の思いを強くした3時間となりました。まさに、「人皆師」を実感いたしました。ご来賓並びにご参加いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

〈参加者〉

来賓

松苓会本部幹事長 小林公雄 (文38)

東京都支部支部長 矢澤喜成 (文50)

支部会員

長野県支部

「軽井沢・追分宿を巡る」文学散歩

副支部長 清水登

去る平成30年9月22日(土)、長野県支部恒例の文学散歩が行われました。10時30分に北陸新幹線のJR軽井沢駅に集合し、最初の見学場所、旧軽井沢銀座にタクシーで向う。11時に旧軽井沢ロータリーに到着。徒歩にて、芥川龍之介ゆかりのつるや旅館、当地を内外に紹介し国際的な避暑地・軽井沢の地位を築いたとされる宣教師、アレキサンダー・クロフト・シヨウゆかりのハウス及び札



追分宿・分かれの碑前にて

拝堂、室生犀星の文学碑、正宗白鳥の歌碑を巡る。室生犀星の文学碑、正宗白鳥の歌碑のある場所が一般的な散策ルートから外れているため、観光客が訪れることもなく、静寂な環境が確保され、文学的雰囲気に浸ることができました。

旧軽井沢銀座にて昼食の後、タクシーにて追分宿に向う。14時に追分宿に到着。中山道と北国街道の分岐場所である分去れの碑、堀辰雄など文学者ゆかりの油屋旅館、堀辰雄の旧住宅を改装した文学記念館、浅間神社、軽井沢町立追分郷土館を巡り、文学散歩を終了しました。

その後、タクシーにてJR軽井沢駅に移動し、16時30分に駅到着。駅前の食堂「まるほん」にて懇親会を開催し、解散しました。

〈参加者〉

廣田克己(文38神奈川)・新井喜義(文37群馬)・小林公雄(文38埼玉)・関保典(文35長野)・清水登(文42長野)

三重県支部

支部総会

事務局長 加藤武俊

平成31年1月19日(土) 午後6時より「津ミートかしわぎ」を会場に松苓会三重支部「朋友会」総会を開催しました。小川支部長より8月に大阪で行われた創設70周年松苓近畿総会の報告がありました。続いて本会も団体加入をしている齋藤拙堂

顕彰会が主催する小中学生書道展

報告が理事

として参加

加してみえ

る稲垣氏より

た。昨年の

第1回展は

45点という

作品が集ま

ったそうで、今年も協力依頼があり、

支援していくことになりました。総

会後の近況報告の中に、昨年の第100

回全国高等学校野球選手権記念大会

に応援に行ってきたという話も出て、

甲子園での母校附属高の活躍の

話題にも花が咲きました。支部総会

の参加者は例年10名前後です。なかなか若い世代の入会はありませんが、年齢を越えて同窓生が一年に一回でも一堂に会せる場はとても貴重



津市「津ミートかしわぎ」にて

加藤武俊(文49) 三林忠明(文34) 伊藤淑子(文38)

宮崎県支部

支部総会

支部長 宮崎宣幸

平成30年度宮崎県支部総会は、31年2月3日(土) 6時から、宮崎市内の「結い」という会場で実施しました。今回は次の5名の出席でした。内村厚夫(文44) 斎田清秀(文44) 後藤祐子(文51) 藤井雄樹(文79) 宮崎宣幸(文41)

大久保昌彦先輩(文38)からは都合で欠席、中園祐子さん(文60)からは当日、上京の予定で欠席という連絡がありました。

総会では最初に大学本部で開催された定期総会の報告をし、次に附属高校の甲子園出場への報告、さらに宮崎県内や九州からの二松學舎大学入学者減少の現状報告をしました。

最後に役員改選を行い、数名候補が上がり、数名候補が上がり、内村厚夫氏が最終候補となり、了解を得ることにしました。現在は固辞してい



宮崎市「結い」にて

ますが、何とか説得して本人の了解を得たいと思っています。

終了後、そのまま懇親会に入り、久しぶりに参加の藤井雄樹氏(文79)から「暫く中学校の方で教えていて、野球部の監督をしていたが、市内大会で良いところまで行った。今年度から高校に戻ってきて大変苦労をしている。大学でも軟式野球を柏グランドでしていた」こと等の報告がありました。近況報告の中で、

いろいろな場面や立場で松苓会との繋がりが有り、話が弾んだり、大学時代の思い出に花が咲いたりして和やかな内に会を終えました。大半が二次会まで参加し、それぞれの学校での状況や、県内の松苓会の先輩・後輩の状況や、各学校での二松學舎への進学を推進する手立てなど、はたまた各個人の近況、今までの支部総会の思い出など、話題が尽きませんでした。次年度は更に多く参加して会が盛り上がるように開催期日を8月最終土曜日頃に、会場は便利で懇親会も出来る所にしようということになりました。

最後に、また次年度も再会できることを期して解散しました。

支部長交代

群馬県(新) 高柳 薫(文47)

(前) 小石さち子(文47)

平成31年1月20日付

北から南から

〔岩手県支部報第81号より〕

大星栄子さん突然のご逝去

「岩手日報、お悔みの欄に大星栄子さんの名前が載っているけど、それって松苓会の大星さんじゃないですよね」という問い合わせの電話が二三日前十時頃、入りました。

あわてて名簿を取り出し、大星さんの住所を告げると、

「やっぱりそうだ。ご本人だ」という電話の声、

突然の出来事に一瞬、茫然としてしまいました。

大星さんは、毎年、七月に開かれる松苓会県支部の総会に出席してくれています。けれど今年は欠席でした。

「本会を楽しみにしておりましたが、同日、二高の白梅演奏会のOGとして出演しますので残念ながら欠席させていただきます。」これが、つい一カ月前のことでした。

私が知っている大星さんは、話し方も決め所を押えて無駄がなく身のこなしもてきぱきしていて、病氣だとか亡くなるとかと云ったイメージとは、まったく結び付かないのです。しばらくは頭が混乱したままでした。それで顔を洗ったり深呼吸をしたりして気持ちを落ち着かせると、近くコンビニで日報を買い、死亡の事実と葬儀の日取りを確認しました。

大星さんが支部の総会に出席され、我々とお付合いするようになったのは、あの東日本大震災がきっかけでした。

二中は震災の津波で最も被害の大きかった浄土ヶ浜、蛸の浜、鉾ヶ崎が学区の半分を占めています。学校は市の指定避難所でもありましたから、二百人から三百人に上る、家を流失した避難者をそのまま預かることになりました。それが校庭に仮設住宅が建設されるまでつづきました。

その間、生徒は春休み延長のままですが、保護者にまかせきりとはいかず、手分けして巡廻し、学力に遅れが出ないよう、時には生徒が受けた心的外傷とも向き合わなければなりません。その中には家や家族を失った、特に心のケアの必要な生徒も数十名いたそうです。

津波の発生直後は、ライフラインも通信手段もなく、すべての責任は校長である大星さんの肩にかかってきます。

しかも二中は副校長が病気で十カ月ほど前から長期に休んでいたため、まさに追い詰められた状態だったそうです。

「とにかく校長の指示、判断で動かしていかななくてはならず、とても苦しかった」と述懐しています。

この時期、大星さんを支えてくれたのは、生徒や職員が皆無事だったことと職員たちの一致団結、それに全国から寄せられた暖かい言葉、励ましの行為だったそうです。

支部が送ったお見舞いと励ましの手紙に対しては、

「津波後に初めて届いた郵便物が、温かいお見舞いの手紙で、涙が出る想いでした」。そして支部会員の皆さんに会って是非お礼を言いたいと思ったそうです。

ただ、県では、すでに内示していた人事異動を、被災地の生徒・児童に配慮して、一年間凍結することになります。大星さんも引きつづき被災後の業務に当たり、多忙がつづきます。

「まだまだ困難は続きますが、何とかやっていますので、ご安心下さい」

大星さんが支部総会・懇親会に出席できるようになったのは宮古二中での仕事を一まず終え西根一中に移ってからです。

「昨年四月から西根一中に勤めています。往復70kmの道にも慣れました。3月11日の震災の時は大変心配をおかけいたしました。ようやく出席できそうです。一言お礼を申し上げたくお会いできることを楽しみにしています」

大星さんがすべての仕事から解放され、自由に時間を使えるようになった時、本当は何をしたいのか、特

に伺ったわけではありませんが、その為の準備はしていたようです。

大星さんは定年になると直ぐ図書館司書の資格を取るべく富士大学に通いました。また、

「江間章子詩歌コンクールの参考図書をさがしに北上の詩歌文学館を訪問しました。ちょっとした文学散歩でした」

そんな報告もいただきました。

突然訪れた死は、大星さんのそんな夢も奪ってしまいました。しかし、残念ではあるけれど、富士大学で講習を受けていた時、

「受講生の多くが無職か非正規雇用であり、改めて教員を定年まで続けることができた幸せを実感した」そうです。そして宮古二中では全能力を出し切って任務を全うなさいました。案外、ご本人は、満足しているのかもしれませんが。

〔岩手県支部長 宮本義孝〕

大星 栄子さん（おおほし えいこ）八幡平・元西根一中校長。20日午後0時24分、大腸がんのため盛岡市内の病院で死去、64歳。盛岡市出身。自宅は盛岡市志家町4の18。火葬は25日午前10時から盛岡市三ツ割の市斎場やすらぎの丘、葬儀は26日午後2時から盛岡市大慈寺町の永泉寺で。喪主は母サチ子（さちこ）さん。

宮古一中校長も務めた。

〔岩手日報〕8月23日付

大星栄子さん 昭和52年3月文学部卒（文45）。平成21年4月宮古市立第二中学校校長。平成23年3月11日の東日本大震災被災後の切迫した業務に携わる。平成25年4月八幡平市立西根第一中学校校長。平成27年3月定年退職。平成30年8月20日逝去。

大学だより

溝口貞彦名誉教授
「瑞宝小綬章」受章



平成30年秋の叙勲において、溝口貞彦名誉教授が教育功勞として瑞宝小綬章を受章しました。

溝口名誉教授は、昭和13年5月生まれ、80歳。

同名誉教授は、昭和56年3月、東京大学大学院教育学研究科教育行政学専攻博士課程単位取得満期退学。聖徳栄養短期大学教授を経て、平成元年4月に二松學舎大学に教授として就任されました。平成21年3月定年により退職され、同年4月名誉教授の称号が授与されました。

本学では、教職課程に所属、教師論、教育史、教育法規、教育実践研究、教育実習などの科目を担当、また、課外活動の国語教育研究会の顧問を務められるなど、本学の教員養成に尽力されました。

松苓会（同窓会）寄付講座を実施しました

キャリアセンター

昨年に引き続き、松苓会「在校生教育支援助成事業」のひとつとして、キャリア・デザイン講座を実施しました。本年度は、2・3年次生を対象に、〈さらに活き活きとした学生生活にする〉〈就職活動で自信をもって自己PRする〉を全体テーマとし、ワークショップを3回開催しました。

第1回目（12月13日 9:20～12:30）
テーマは「自分らしさ発掘ワークショップ」

自分が活き活きしていた体験を振り返り、その中にある「自分らしさ」



を探索するワークショップで、講座はペアインタビューやグループワークを中心に実施しました。参加者は30名でした。

第2回目（12月13日 13:30～16:40）

テーマは「コミュニケーションスキルUPワークショップ」

グループ活動におけるコミュニケーションのコツを楽しく学ぶワークショップで、正解のない課題に対してグループで話し合い、その後結果を発表するという講座でした。参加者は8名でした。

第3回目（1月31日 9:30～12:40）
テーマは「自分づくりワークショップ」

講座前半では自己PRシートの作成をし、後半は作成したシートを使つてのグループワークでした。自己PRで「良いと思ったところ」や「よくわからなかったところ」などをメンバーからフィードバックしてもらいました。参加者は26名でした。

参加者は延べ64名、2年次生も2名参加し、楽しく主体的に学んでいました。アンケート結果では、「楽しく自分らしさを発見できた」「思っていたよりもグループワークが盛り上がった」「他者からのフィードバックは貴重な体験だった」等、満足したという回答が多数を占めました。

次期学長に
江藤茂博教授を選任

学校法人二松學舎は、昨年十二月十八日開催の理事会で、本年三月三十一日で任期満了となる菅原博子学長の後任に、江藤茂博教授（現・文学研究科長兼文学部長）を選任した。任期は二〇一九年四月一日から二〇三三年三月三十一日まで。

（二松學舎新聞「第71号より」）

教員免許状更新講習のお知らせ

平成31年度の教員免許状更新講習が次の日程で開催されます。

期日 8月5日～9日

会場 二松學舎大学九段校舎
受入人数 100人

詳細は、教職支援センターにお早めにお問い合わせ下さい。
電話03（3261）1375

平成31年度 大学説明会の案内

大学の最新情報を知るよい機会となります。奮ってご参加ください。

○福島県福島市

期日 平成31年6月22日（土）
会場 ホテル辰巳屋

○静岡県静岡市

期日 平成31年6月29日（土）
会場 （未定）

○岡山県岡山市

期日 平成31年7月6日（土）
会場 メルパルク岡山

卒業生名刺交換会を開催

平成31年2月23日(土) 九段下のホテルグランドパレスで、大学と松苓会の共催行事として卒業生名刺交換会を開催しました。会は、ビジネス界で活躍する本学卒業生に異業種間交流の場を提供し、情報交換や在学生の就職支援にも結びつきたいとの思いから開催しています。

4回目を迎えた本年度は文学部卒業生35名、国際政治経済学部卒業生21名、大学教職員、松苓会役員を合わせ、総勢95名が参加。若い卒業生の活気あふれる和やかな交流会となりました。

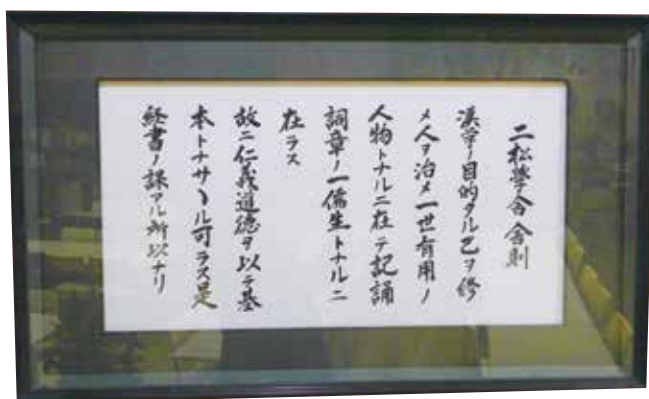


ホテルグランドパレスにて

中洲記念講堂入口に
「二松學舎舎則」額掲出

大学九段1号館地下2階ホールの中洲記念講堂入口前に本学建学の精神とする「漢学ノ目的タル己ヲ修メ人ヲ治メ一世有用ノ人物トナルニ在テ」(「二松學舎舎則」)の額が昨年から掲出されている。

この一文は明治10年創立の漢学塾二松學舎の目的を記したもので、明治12年6月改正と記された「二松學舎舎則」に漢学大意として記されている。冒頭は「漢学ノ目的タル」で始まっている。二松學舎90年史、百年史には、その後改正された「本舎ノ教旨タル」で始まる舎則を掲載している。

「朝日教育会議」を開催
グローバル時代に問われる「国語力」とは

文学部長 江藤 茂博



の、いわば根幹を示すものでもあった。

齋藤氏の基調講演では、漢字の大切さから、教科としての「国語」の重要性、さらに漢文素読の必要と、漱石の漢文の素養を例に取り上げながら、ご自身の国語教育で育まれる母語能力の重要性を展開された。

二部では、学生らの演出による漱石アンドロイドによる小説「こころ」の朗読と、山口直孝文学部教授による講演「小説と声」が行われた。作者自身が朗読するという場での、小説作品受容の力学の顕在化が、表現への関心を高めていくことになると言及。我々の母語である「国語」への新しい表現研究の可能性について報告。

二松學舎大学を会場に、10月13日「朝日教育会議2018」を開催。朝日新聞社が15大学と協力して展開するシンポジウムのひとつとして、第3回は「グローバル時代に問われる『国語力』とは」と題した一般向けのものだった。全体は三部構成で、齋藤孝明治大学教授による「基調講演」「夏目漱石特別教授(漱石アンドロイド)の登場」、二松學舎大学の教員を加えた「パネルディスカッション」が繰り広げられた。来場希望者も抽選となる程の盛況となり、当日は中洲記念講堂を埋め尽くす熱い盛り上がりを見せた。このテーマは、「国漢の二松學舎」としての本学国語教員養成の伝統を踏まえ、さらに日本文学・日本語学・漢文学・中国学と、新制大学設置以来の日本文化の教育研究を重ねてきた本学

第三部は、パネルディスカッションに、袖川裕美愛知県立大学准教授をお招きし、司会進行は一色清朝日新聞社教育コーディネーターが担当、「国語力」についての論議を重ねた。まずは、「国漢の二松學舎」ということで、江藤が口火を切ることにとなった。高等教育機関としての関心事は、社会を生き抜くための「国語力」の養成を意識していることを述べた。続いて、同時通訳者でもある袖川氏は、多様な意味を含む言葉を通訳するのに、日本語の高い表現力が必要となることを、体験的に指

摘。張佩茹文学部専任講師は、母語と第二言語との運用できる表現力の違いから、母語の重要性を指摘。それを受けて、荒井裕樹文学部専任講師は、日本語の持つ感情の細やかなグラデーションを表現するのが得意でない今の学生たちには、細やかな表現へと母語を掘り下げていくことを求めていると。一方、小久保欣哉国際政治経済学部准教授は、ビジネスシーンで必要とされるコミュニケーション能力は、人の話に耳を傾け、適切な表現で問う能力、つまりは「国語力」の問題となると訴えた。

母語の高い能力は、生きていくためのあらゆる場面に必要であり、登壇者たちは、そのためには読書が重要だという。つまり、豊かな語彙力を持ち、また自分の細やかな感情も的確に表現できて、さらに他者とも共有共感できる日本語運用能力の必要性和、それを育む読書の必要性を指摘。

二松學舎大学が「高い国語力を持った若者の育成」と掲げているのも、豊かな表現力と鋭い読解力とで社会に向き合うグローバル人材を、「国漢の二松學舎」以来、育ててきたからのことである。

「朝日教育会議」は平成30年11月3日の朝日新聞に掲載された。

記事は次で読めます。

<https://www.asahi.com/articles/DA3S13752544.html>



夏目漱石特別教授（アンドロイド）



パネルディスカッション



齋藤孝明治大学教授

2019 進学特集

カップ麺で経営学

二松学舎大学

国際政治経済学部



カップ麺のマーケティング手法について小具准教授（右奥）を交えグループで話し合う学生（10月3日、二松学舎大で）

二松学舎大（東京都千代田区）が今春、国際政治経済学部の新設した国際経営学科。新製品開発を学ぶ小具龍史准教授（43）のゼミでは今月3日、学生15人が今年発売されたカップ麺を題材に製品の市場戦略を決めるのに重要な「差別化」などを考えた。「カロリーとか、あえて大きく書いている」「安いから高校生に売れそう」など様々な

意見が出た。銀行系調査研究機関に20年以上勤めたという小具准教授は「経営学では実際の事例を扱うことが大事。まずは身近な題材を扱うグループワークで楽しんでほしい」と話す。

この日の授業は、2年生から履修する「経営組織論」など全11ゼミを体験する必修の講義。選ぶゼミは一つだが、学生の視野を広げ、ミスマッチを防ぐのが狙いだ。

参加した浅見紘陽さん（19）は「IT系分野での起業に興味を持っていて、チームで考え、他人の意見を聞く姿勢を学びたい」と意気込む。

国際経営学科は、ビジネスの基礎となる法律やIT知識などを幅広く学び、即戦力となる人材や起業家の育成を目指すとしている。1年生で統計学、法学などを学び、2年生からはマーケティング概論など、ビジネスに直結する授業が一気に増える。

佐藤晋・学科主任は「企業の経営戦略も、世の中の仕事も、時代とともに大きく変わる。どのような変化にも対応できる力を持った学生を育てたい」と話す。

「読書新聞」平成30年10月21日掲載記事より

国際政治経済学部創設時の 沼南教務課・学生課

大淵俊明（文50）

私が、採用の辞令を拝し母校へ奉職した昭和57年に沼南校舎（現柏校舎）が開校しました。私は、学生部学生課に配属され、千代田校舎（現九段校舎）に勤務しておりましたが、平成4年に異動の辞令を拝し沼南校舎に着任しました。沼南校舎では平成3年に国際政治経済学部が開設され2年目を迎えていました。その時の沼南校舎教務事務組織は、学務部長・橋本栄治先生の下に沼南教務課、沼南学生課の2課が置かれて



▶平成4年7月、伊藤淑平学長、橋本栄治教授（学務部長）出席のもとで、千代田・沼南の教務部門合同の夏休み前の打ち上げが沼南校舎で行われた。



平成10年頃の沼南校舎職員

いました。沼南教務課は百瀬寛海課長、斉藤広子課員、伊藤友理子課員、山口（西園）隆士課員、増田光司課員、馬淵裕之課員、そして私（大淵）の7名、沼南学生課は井上和男課長、瀬尾勝義課員、新井幸子課員、小西明徳課員、江本利彦課員の5名合計13名で構成されていました。

この年、新1年生を加えて沼南校舎には文学部の1・2年生と国際政治経済学部の1・2年生が揃って在籍することとなり、千代田校舎の文学部3・4年生と併せて2キャンパスから成る現在の二松學舎大学の原型が成立しました。

ここから、新しい組織の設立、現在も継続されて行なわれている学内行事の開始等大きく変化していくこととなります。

まず、平成5年には学務部が学務局と改められ橋本栄治先生が学務局長となりました。そして、「二松

學舎大学父母会」が結成され沼南学生課の所管となりました。

父母会主催行事として「地区別父母懇談会」が開始され、全国10都府県を訪問しました。これは、学生の在学中に一回は父母の皆さんに大学の近況、学生の状況等を報告することを目的として大学教員と事務担当者全国を訪問するものです。

また、同年沼南校地に5号館が竣工しました。5号館は、地上3階建て1階に学生食堂、2階・3階に附属図書館分館が設置されました。続く、平成6年には学務局長に斎藤喜代子先生が就任され、沼南学生課に山口朗課員が配属されました。

そして、学生の海外への扉を開く「オーストラリア語学（英語）研修」が初めて実施され、国際化に向けて大きく一步をふみだしていくこととなります。

翌平成7年には「海外研修旅行（中国）」が実施され、いよいよ「国際交流センター」が開設され、蔡秋雄センター長（国際政治経済学部教授）、井上和男事務室長（沼南学生課長兼務）、島田穂隆室員の3名体制でスタートしました。

更に、同年沼南校地に学校法人二松學舎創立120周年記念事業として「武道館」が竣工しました。これは、武道関係クラブ卒業生等の長年の夢が実現したものでした。その後、各部ともここを拠点として精進し、全国大会へ出場を果たしていくことと



平成7年12月竣工の武道館

なります。平成8年、二松學舎大学における大改革が実施されました。「カリキュラムの改訂」です。従来のクラス指定等の画一的なカリキュラムから、自由に選択することが可能な科目を多く置くことにより、学生個々の学びの要望をかなえたいとするカリキュラムでした。しかし、改訂を見据えて協議を進めるうち「産みの苦しみ」ともいうべき難題が次々と指摘され、遂には担当教員・事務担当者揃っての合宿により早朝から深夜まで協議・検討の積み重ねの結果成案としたものでした。その後も、運営に際して多面からの要望、指摘も多く、継続して協議・検討が重ねられて今日のカリキュラムへと続いていくこととなります。

大学教育の根幹をなすカリキュラムの改訂に携われたことは大学職員として、その後の業務の遂行の大きな糧となりました。

（本学附属高等学校事務長）

卒業生だより

辰巳正明氏(文36)
「日本学賞」受賞

日本に関する学術並びに日本文化遺産の顕彰に寄与することを目的に設立された一般社団法人「日本学基金」(中西進理事長)の第6回「日本学賞」に辰巳正明氏が受賞されました。東アジア全体を視野に入れた古代和歌や古代歌謡の研究が評価されたものです。贈呈式が平成30年11月23日、東京・学士会館で行われた。

辰巳氏は、本学文学部国文学科を昭和43年3月卒(文36)、同45年3月大学院文学研究科修士課程修了、同48年3月名城大学大学院博士課程満期退学。大東文化大学教授を経て國學院大學教授就任、現在、國學院大学名誉教授。博士(文学)。

著書に、『万葉集と中国文学』『万葉集と中国文学 第二』『詩の起源 東アジア文化圏の恋愛詩』『万葉集に会いたい』『短歌学入門―万葉集から始まる(短歌革新)の歴史』『詩論―人はなぜ詩に感動するのか』『折口信夫―東アジア文化と日本学の成立』『万葉集の歴史―日本人が歌によって築いた原初にヒストリー』『山上憶良』『懷風藻全注釈』『王梵志詩集注釈―敦煌出土の仏教詩を読む』(以上笠間書院)『長屋王とその

時代』『歌垣―恋歌の奇祭をたずねて』(以上、新典社)『万葉集と比較詩学』(おうふう)『悲劇の宰相長屋王 古代の文学サロンと政治』(講談社)など。他に著書、編著、論文多数。

岡野康幸氏(文67)
『浦野匡彦伝』を出版

平成11年3月文学部中国文学科卒(文67)の岡野康幸氏が『浦野匡彦 上毛かるた生みの親の生涯』(みやま文庫)を出版した。

浦野匡彦は、二松學舎専門学校第2回卒。理事長、学長、松苓会長を務められ、昭和61年12月逝去。

まえがきに「群馬県民なら誰もが知っている『上毛かるた』を作った人は誰かと聞いた場合、『浦野匡彦』と果たして何人が答えられるだろうか。」と、浦野匡彦の伝記の一視点を「上毛かるた」に置き、浦野匡彦の社会福祉関連資料も付録として掲載している。

同書は、第7章からなり、第5章、第7章は、濱野靖一郎氏(二松學舎大学大学院博士前期課程修了・文修36)が担当している。

岡野氏は、学部卒業後、平成13年3月大学院博士前期課程修了、同19年後期課程単位取得満期退学。群馬医療福祉大学社会福祉学部講師。

恩師からの便り

韓流シネマを散歩中

田村紀之



私は現在、映画評論家に「転身」し頑張っています。ただし評論家といっても、もっぱら韓国映画に特化し、経済学でいう「比較優位」を保とうとしています。

もともと私は、東映時代劇で育った、大の映画狂でした。ですから第二の人生は映画でと、かなり以前から決めていました。映画館通いも結構疲れますが、シルバー料金制をフルに活用しています。

月に一度のペースで、東洋経済日報紙に「韓流シネマの散歩道」という随筆を連載しています。時間のた

つのは速いもので、すでに40回を数えることになりました。区切りのいいところで単行本にまとめ、出版したいと思っています。

また二松學舎大の柏キャンパスでも、「韓国の映像文化と社会」などのタイトルで、生涯学習講座の末席を汚しております。その実態は要するに、韓国映画を鑑賞し解説を添えるという、手抜き授業です。それでもリピーターの受講者も多く、なかには過去7年間、連続聴講していた方もおられます。

韓国映画が注目されだしたのは1980年以降のこと。日本人観客を仰天させるような傑作が、相次いで公開されたからです。現在もその人気は衰えるどころか、ますます隆盛を誇っています。皆さんもぜひ、韓流シネマを覗き見してみて下さい。(客員教授)

会員からの便り

茶道部を指導して

徳岡めぐみ(文43)

私が大学を卒業して半世紀近く過ぎて参りました。その後も何かと関わりを持たせて頂き、大学が第二の故郷のようでございます。在学中は、狂言研究会に所属、大蔵吉次郎先生が四年生の時の入部でございます。今でも校内で先生にお目に掛かりますと優しくお声を掛けて頂き、嬉し

く存じます。3年の時に箏曲部、その後茶道部を立ち上げました。残念ながら箏曲部は数年前に廃部になりましたが、茶道部は45周年を迎えます。

私の茶道との始まりは、お琴を習っていた先生が大日本茶道学会の先生でしたので、その門下に入りました。流派の会長(家元と同義)が、二松の卒業生の縁もあり、昭和49年に設立、以来私の師の奥村里樵先生と指導して参りました。その間、200



名以上の方が茶道部を卒業して行きました。自慢では有りませんが、茶道部の卒業生は、皆様、素直で思いやりが有り、優しい方々で、自信を持って社会に送り出せました。素直なのは二松全体の雰囲気かもしれないですが、奥村先生の指導が行き届いているのでしょうか。学部の変化は有りましたが、二松の学生さんは昔から真面目な方々のようにお見受け致します。

茶道は、ただ点前（作法）をお教えるものではありません。人との交わりの中、人を敬う心を育て、日本人の心を育てていくのです。お茶を呈する作法により、お客様に心を込める、いわゆるおもてなしですね。

茶道のもてなしは、美しい振る舞いときれいな日本語で人に優しく接し、お互いに思いやる心を育て、道具を大切に扱い、物の美しさを伝えます。茶室は、人に心地よい空間を提供する場となります。私はまだまだ修行途中ですが、こんな気持ちで学生さんたちと接しております。

現在、二松の茶道部指導の他に、

専門学校の非常勤講師として週3時間、茶道の指導をしております。その両方の学生さんたちに、茶道を通して少しでもおもてなしの気持ちを持ってもらえれば幸いです。

演劇との出会い

鈴木龍男（文44）



私は44年生
1976年卒業です。その後すぐ、劇団前進座文芸演出部に入り、今日まで42年間演劇畑一筋でやってきました。前進座に行こうと考えた経緯には、ゼミの教授の影響が多分に働いています。私の所属は、飯塚友一郎先生の「戯曲研究」というゼミでした。飯塚先生は、東京帝国大学法学部出身で、卒業後10年も弁護士をやりながら、演劇研究教授になったという珍しい経歴でした。中でも歌舞伎に造詣が深く『歌舞伎細見』は、後の歌舞伎研究者のバイブルと言われる著書でした。前進座は、松竹以外で歌舞伎を上演している唯一の劇団です。歌舞伎だけでなく山本周五郎原作の時代劇や現代劇、青少年向けの舞台など広い分野で活動していました。大学に入る時は、教員をめざしていたのですが、3年の時に出会った飯塚先生に感化され、歌舞伎をはじめ演劇の世界に魅了され、前進座に入りました。

現在は、演出・脚本で活動し、前

進座だけでなく他劇団も含め年間6〜7本の舞台を演出しています。今まで前進座では、歌舞伎・時代劇・青少年劇場と広い分野で演出する機会を得ました。直近の昨年は、1月劇団仲間の「森は生きている」・3月子ども劇場いたばし「ゆうれい貸屋」・前進座養成所「楽屋」・4月劇団たんぽぽ「ウニマルじゃ!」・6月前進座「龍の子太郎」・7月創造集団池小「アンティゴネ」（ブレヒト）・10月三越劇場「樋口一葉・20歳の時」・11月座吉祥天女「あすなろう」・「あだこ」・12月劇団仲間「森は生きている」などの公演がありましたが、新しい劇団とも取り組んでいきたいと思っています。大学の同窓会などの繋がりで新たな出会いがあればとも考えています。卒業生の中から演劇の世界に飛び込んでくれる青年を待ち望んでいます。

近況報告

小島貴雄（文47）



高校2年生の時に書店で引き付けられるようにふと手にした一冊の文庫本『文学をどう読むか』（佐古純一郎著現代教養文庫）。石原慎太郎著の芥川賞受賞作『太陽の季節』に、時代の風潮を赤裸々に描写する新進気鋭の作風として感銘を受けた

私に、囁き掛けるように『文学とは何か』を教えてください、魅せられました。

是非とも先生の教えを請いたいという思いが募り受験した際の面接試験で、偶然にも先生が面接官でした。その際に幼稚な文学観を述べた私に優しく微笑みながら太宰治著の『人間失格』の読破を推奨してくださいました。

ゼミナールでは、夏目漱石の小説を読みました。次学年は芥川龍之介の小説を読みました。自らの研究テーマは有島武郎の大正中期です。まだまだこれから学び続けたいの思いを抱いていた折、郷里の私立高校から教員採用の誘いがあり、『文学への愛』を生徒たちに教えたい思いで教職に就きました。

その際にいただいた恩師からの言葉が『喜ぶ者とともに喜び 泣く者とともに泣け』（新約聖書ローマの信徒への手紙12章15節）です。この言葉を胸に刻み、教員生活を送ろうと決意しました。

大学を卒業したての22歳の若造が、いきなり1年生の担任。あつという間の無我夢中の持ち上りの3年間。反省と試行錯誤を繰り返した持ち上りの3年間。そして充実の再び持ち上りの3年間。この9年は私の教員生活の基盤を構築してくれただと思っています。

文学研究は怠惰な性格が故に忘れ去りましたが、文学の三大テーマで

ある《生・愛・死》を常に多角的に観る視点の大切さを教え続けてきたと思っています。生徒との接し方においては、如何に全力で取り組むことが大切かを学びました。手抜きがあれば、生徒は敏感に感じ取ります。真剣に向き合えば、輝く瞳で応えてくれます。教員のあるべき姿の一端を学ばせてもらいました。

教員生活を重ねるにつれ、教職のコツ的なものは掴みましたが、徐々に生徒に見合った気力・体力が緩慢になり、がむしゃらに生徒にぶつかっていく姿勢の衰えを自覚し、就業時に受けた若い力を全面発揮して生徒と接する機会を、次なる教育の担い手である若者に一刻も早く引き継ぐことが教育界において重要であることを悟り、《老兵は去れ》という境地に至りました。そして60歳定年を機に高校教師を辞し、生徒の大会参加・遠征・派遣等の補助業務で培った30年来の大型運転免許資格を活かし、昨年4月から幼稚園バスでの園児の送迎業務に携わっています。

教員生活しか知らない者が、退職を機に社会貢献的役割を担うことは新たな挑戦であり、多くの戸惑いがあります。父が広島での被爆者である関係から、高齢化等の要因で解散の危機に瀕していた富山県被爆者協議会の運営の手助けの要請を受けました。昨年7月に創設された二世・三世の会の初代会長を任され、更に本年四月からは協議会の会長を任さ

れています。周囲の多くの人々の見えない力に支えられてこそ務めることができるのだと気付かされています。

卒業してもどっぷり二松學舎

桑原玲子(文63)

二松學舎大学で出会った方々や、そこから発展した人との繋がりは、私の宝物です。

専攻韓国語コースを履修していた私は、今でも呉英元先生が大好きです。大学4年間毎年履修した先生がただ一人いて、それが呉先生です。在学中の講義に韓国研修旅行、卒業後のご自宅訪問。いつも電話口で「桑原さん？」と呉先生独特のリズムがある呼びかけを聞くと、楽しくてお喋りの尽きることがなく、先生のお時間をいただいています。

昨年10月16日には一号館13階ラウンジで、呉先生の自叙伝日韓同時出版記念がありました。会場では懐かしい先生方にお会いできました。滑舌はつきりマイク不要の山崎正伸先



生、穏やかで丁寧な林謙太郎先生、いつも笑顔でユニークな塩田今日子先生、スポーツ不得手な私をカバディ全日本選手権に導いてくださった金子茂先生、個性的な髪型のミスターハンブル兼若逸之先生。先生にとつては学生は毎年大勢いても、私にとつては先生はやはりそれぞれに一人です。年賀状だけの繋がりでなく、お世話になった先生に改めてのご挨拶とお話とができて嬉しかったです。

11月3日ホームカミングデーの山崎正伸先生の和歌講座では、友人二人と遭遇しました。卒業式以来です。から、お互いに目を見張り面影を探りつつ、まさに驚きの声をあげました。恐らくこの日再会しなければ、同期生とはいえ交流を持つことはできなかったでしょう。

平成7年に卒業してから、既に四半世紀近い時を経ています。しかし、恩師や友人に会えば、一瞬にして若返り気分は学生になります。新校舎のラウンジにいます。昔の木の長椅子や書道教室、コンクリートの壁の階段や図書館のカウンターが蘇ってきました。

私は在学4年間、混声合唱団コール・エコースに所属していました。近年は大学生の部活動への不参加を耳にしますが、コール・エコースも部員が減少気味のため、定期演奏会開催にあたり卒団生へ参加支援の依頼がありました。卒業後も合唱を続

けている人、私のように歌から離れた人、家庭や仕事もある社会人達が、所属した時期も年齢もさまざまな卒団生達が、結集しました。大学生の若く透明な声に、卒団生の少しばかり厚みのある声を重ねつつ、四半世紀以上もコール・エコースをご指導いただいているオペラ歌手の佐竹敬雄先生のもとで、ハーモニを奏でています。1962年に創部され57年の長き伝統のある、コール・エコースの歴史と伝統を継承すべく、頑張っています。

来年2020年4月にはコール・エコース第53回定期演奏会の開催を予定しております。松苓会の皆様も、ぜひ足をお運びください。お待ちしております。

学生時代、他大学に比べて二松學舎は勉強づくめの濃いカリキュラムでした。そして卒業後も、私はまだどっぷり二松學舎を満喫しています。素敵な母校に感謝しております。

蜂須賀正氏博士の著作を編集・刊行

小野塚 力(文64)



1998年に国文学修士課程を修了し、その後は会社勤めの傍

ら、趣味として専門の芥川を中心に近代文学研究、絶滅鳥類関連の研究をおこなっていた。

その結果、同人誌というかたちで、2015年、京都のモダンニズム作家、山田一夫の作品集『初稿夢を孕む女』を知人と共同編纂し、刊行することができた。山田一夫は、芥川研究者でもあり、「夢を孕む女」は、芥川と片山廣子の関係をもとに描かれていることがわかった。堀辰雄「聖家族」と対をなす作品である。翌16年、西荻窪にある画廊、数寄和にて、日本画家、マコト・フジムラ氏のトークイベントの聞き手を務めた。この仕事は、師、故・中村宏先生への御恩返しに気持ちで臨んだ。続く18年、徳川慶喜の孫であり、華族にして鳥類学者、絶滅したドードー鳥の専門家、蜂須賀正氏博士の単行本未収録随筆集成『鳥の棲む水の国』をやはり私家版で、まとめることができた。蜂須賀正氏博士は探検家であり、日本人ではじめて野生のゴリラをみた人間でもある。蜂須賀正氏博士のエッセイ、とりわけ旅行記は抜群の面白さである。本書に収録された戦前の沖縄滞在記「琉球採集旅行記」、アイスランド旅行記「鳥の棲む水の国」は興味深い内容となっている。

商業出版では、以下の書冊について、編集協力という形で参画している。

- ・蜂須賀正氏『世界一の珍しい鳥』（2017年、原書房刊）
- ・片山廣子『片山廣子翻訳集成 火のあとに』（2017年、幻戯書

房刊）
・正岡容単行本未収録作品集『月夜に傘をさした話』（2018年、幻戯書房刊）

現在、西荻窪にある古書店、盛林堂書房の盛林堂ミステリアス文庫に立ち上げから参加し、できる範囲で、日々、文学や博物学にかかわる日々をおくっている。

※『鳥の棲む水の国』および編集協力で参加した伊庭心猿作品集『真間』は、以下で購入可能。
<http://seirindousyobou.cart.fc2.com/>

ヴィオラ 音の広がり

志村和紀（文64）



私は23年前に文学部国文学科を卒業し、現在ヴィオラ奏者として、また音楽プロデューサーとして活動しております。松苓会ご共催の第1回卒業生名刺交換会に参加させていただいたことをご縁に寄稿の機会を頂戴いたしました。

仕事から様々な国の音楽家と一緒することがございますが、先日、台湾の作曲家の方にご挨拶した際にお世辞ながらも発音を褒められたことがございました。私は在学時には真面目な学生ではございませんでしたが、第一外国語で選択した中国語にて丁寧に発音のご指導をいただいた

た賜物と存じますので先生方に感謝しております。また、こうした学びの環境を整えて下さった二松學舎大学への感謝とともに、国語学ゼミのゼミ長として所属させて頂き卒業まで導いて下さった故清水義昭元学長にもこの場をお借りしまして深く感謝申し上げます。諸事情により音楽大学に進めなかった身でしたが、ゼミでは詩と音楽の相関について国語学と音楽の観点から卒論を書かせていただくことができました。

さて、ヴィオラ奏者としての私の活動ですが、これまでにカラヤン時代のウィーンフィルのコンサートマスターと共演をしたり、紅白に出演するような歌手のバックで演奏をしております。様々なCDやCM等にも私の演奏したヴィオラの音を入れており、小中高の音楽教室ではオーケストラの中で演奏もしております。インターネット上で聴きたいだけのものであれば、NHK・Eテレの『音楽ブラボー』にて第1回と第10回のクリップの中でセリフをいただいたり演奏をしている様子が動画として上がっております。

現在は「アイリス音楽振興会」という音楽事務所を立ち上げ、様々な音楽家とともに音楽文化の裾野を広げられるよう日本全国にて尽力しております。「モノ」消費から「コト」消費に嗜好が変遷している昨今、価値ある時間と体験をご提供できるよう努めております。皆さまが勤務さ

れていらつしやる法人様・学校様に生演奏の需要がございましたら弊社をご利用いただけますと幸甚でございます。OB・OGの方々にお会いできる機会はなかなかございませんが、そうした際にお目にかかれまことを楽しみにお待ちしております。

『陽と波』のバックナンバーを探しています。

文芸同好会 代表 鈴木勇人
文芸同好会です。前年度行われました大規模資料整理の結果、『陽と波』のバックナンバーの一部（5号・9号・11号・28号・29号・39号・43号・50号・57号）に欠損があることが判明しました。OB・OGの中でお持ちの方がいらつしやいましたらぜひ公式ツイッターまたは大学に手紙などご連絡いただけたら幸いです。またこの場を借りまして文化祭に来てくださり、部誌を郵送してくださったOBの方に感謝いたします。

（国文学科 2年）



学生会員だより

今号はサークル紹介と創縁祭報告です。

サークル紹介

GREENWORKS

水口拓哉

今現在30名が所属しており、地域密着型ボランティアということをコンセプトにして週に3回活動を行っています。大学周辺のゴミ拾い活動や、作戦会議と称してメンバーで話し合う機会も設けています。作戦会議ではゴミ拾い活動を振り返り、ボランティアのイベントの告知などを共有しています。また地域密着型ということもあり、毎週金曜日に三崎町ふれあいサロンで地域の高齢者の方と『まもりたいぞう』という象の



形のタオルを制作しています。完成品は地域の祭りなどの機会に販売し、区内に避難してきた方の復興支援にあてています。そのほか、千代田区社会福祉協議会の職員の方と連絡を取り、千代田区で行われている行事のサポートをしています。

千代田区にある大学のボランティアサークルが集まる「学生ネット」というものがあり、私たちもこれに参加しています。ここでは千代田区のために何かできることはないかと考えたり、月に一度集まり、企画や他大学の団体の活動内容の共有をしたりして、お互いに刺激しあっています。

これから地域密着ボランティアを意識して活動を行っていきたいと考えています。

多目的音楽サークルGHZ

佐藤那菜

多目的音楽サークルサークル長を務めている佐藤那菜です。

我々は、主な活動として年に5回

ほどの定期ライブを行っています。大学の行事としては新入生歓迎式典と創縁祭に参加しており、今年はPOP祭への参加も視野に入れています。

演奏する音楽ジャンルは様々で、ロックにポップス、洋楽、アニソンにボカロなど、それぞれのバンドが自由に日ごろの練習の成果をライブで披露しています。

二松學舎大学には4つの音楽サークルがありますが、その中でもGHZは「多目的音楽」の名の通り多目的な、つまりはバンドやパートに縛られない自由な活動を行っています。バンドメンバーはライブごとに募集しなおすことで毎回違った面々と組めるシステムになっていますし、パートを固定しなければならぬ決まりなどもないので自分のやつ



てみたいことがすぐに実践できます。また、新入生が入会した直後のタイミングで行っている「シャッフルライブ」ではくじ引きでランダムにメンバーを決めることで、初めて参加する新入生にも先輩や同輩とコミュニケーションが取りやすいよう配慮しています。

合宿も夏期休業期間の8月に実施しています。この合宿はどちらかというとサークル内での親睦を深める意味合いが強く、昨年は河原でのバーベキューや花火などを楽しみました。この合宿をきっかけに仲良くなり9月に控える「夏ライブ」で一緒に組む、という人も多いようです。また、男女で部屋を分けることはあっても学年で分けることは基本的にはないのでその点も交流を深めやすいポイントになっています。

昨年は2年生から入会した1名を含めて新たに計6名が入会し、全体で26名が所属しているこのサークルを、これからも自分たちの好きなことで盛り上げていきたいと思っています。

創縁祭報告

平成最後の創縁祭

本年度の学園祭実行委員長を務めさせていただきました、文学部3年次の富田樹里です。

平成30年11月3日(土)、4日(日)の二日間にわたり創縁祭2018を



開催いたしました。2200名を超える多くの皆様にご来場いただき、笑顔と活気の溢れる学園祭となりました。ご来場いただいた皆様より「二松學舎大学らしさがあり、学生の自主性を感じられて良かった」とのお言葉を頂き、二松學舎大学の魅力を伝えることができたのだと嬉しく思います。

また、本年度の創縁祭のテーマは『刻む〜平成最後の創縁祭〜』であり、このテーマには「創縁祭に携わってくださる方々と共に刻む時間を大切にしたい」として「楽しさ・喜び・感動が、心に刻まれるような充実したものになりますように」このような思いを込めておりましたが、皆様からいただいたお言葉からそのテーマがまさに実現できたのだと実感しております。お力添えいただいた本学松苓会、父母会、教職員の皆様を始め、学内団体の皆様に心より御礼申し上げます。誠に有難うございました。

最後になりますが、創縁祭という名前には『素敵な「縁」が「創」ら

れる学園祭になるように』という想いが込められており、私自身も準備や当日の発表に費やした時間や経験の中にとっても価値のある出会いや学びを見出せる素晴らしいイベントだと思っております。この春には平成に代わり新たな始まりを迎えることになりましたが、二松學舎大学の魅力を伝え、そして素敵な「縁」を創ることができるようこれまで以上に素晴らしい創縁祭になりますよう学園祭実行委員一同努めてまいります。



『戦後日本の国語教育 二松學舎に学んだ沖山光の軌跡』紹介



沖山光研究会編になる『戦後日本の国語教育 二松學舎に学んだ沖山光の軌跡』が昨年3月に二松學舎大学学術叢書として東京学芸大学出版会から発行されました。

沖山光研究会は本学東アジア学術総合研究所内に組織された沖山光の業績を顕彰する共同研究プロジェクトで磯水絵、太田由紀夫、榎本善紀、樋田明、小測朝男の各氏が執筆している。

沖山光は二松學舎専門学校第1回生（昭和6年卒）。戦後、文部省教科書編集委員として最後の国定教科書の編纂に携わる。構造学習論を提唱。平成2年8月没、85歳。

同書の目次を掲げる。

緒言

第1章 教師を目指す

第2章 二松學舎専門学校時代

第3章 文部省時代

第4章 諸家との交流

第5章 構造的読解指導の形成

第6章 構造的読解指導の提唱

第7章 沖山光の教育思想

第8章 『低学年における総合的取扱の研究』について

寄付者芳名

平成30年3月1日から平成31年2月末日までにご寄付いただいた方のご芳名を掲載します。（敬称略）
 たくさんの方のご協力に心より感謝し、厚くお礼申し上げます。
 （一口千円）

五十口	澤 幹男	専 17	平岡才二郎	文 26
三十口	早崎 静子	文 41	久保田尉世	文 35
町田 哲夫	文 42	新井 喜義	文 37	
二十口	國上 明	文 40	石塚 法子	文 38
十口	末吉 榮三	専 12	佐藤 節三	文 38
小田 和磨	専 17	持丸 敬子	文 40	
井上 賢正	文 27	赤枝美智子	文 42	
深澤 賢治	文 37	野口美智子	文 42	
能村 玲子	文 37	数見 等	文 43	
小林 孝彰	文 38	今川多佳子	文 44	
小林 公雄	文 38	吉永亜理子	文 52	
廣田 克己	文 38	川嶋 洋子	文 54	
大西 邦美	文 40	安倍 洋子	文 54	
高橋かほる	文 40	川保 茂	文 63	
青野 有美	文 41	星野 恭子	文 69	
小坂 鉄朗	文 41	三野 正貴	政 15	
山崎 正伸	文 41	吉野恵津子	文 37	
井上 和男	文 42	小林 政明	文 39	
宮下 宗樹	文 43	岡田 博	文 48	
柴田 善達	文 43	齋藤 賢康	文 49	
柴田 善子	文 48	齋藤 衛	文 49	
佐賀 敦司	文 49	荒井 尚美	文 51	
黒沢 敬二	文 52	石渡 康子	文 54	
中崎 吾朗	文 52	江村 春彦	文 55	
鷺尾 和由	文 54	笹崎 史子	文 57	
奥澤 博行	文 54	齋藤 千絵	文 57	
早野健太郎	文 57	新海 直	文 59	
吉永知佐子	文 59	木野のぶ	文 61	
柴田 承寛	文 62	上田 道子	文 65	
木村 洋裕	文 78	小笠原至亮	文 68	
藤田 佳應	文 24	細川 直吉	文 75	
		滝口 明子	文 77	

訃報

横須賀司久名誉教授（文35）
 平成30年12月4日逝去 享年77歳
 横須賀名誉教授は、昭和42年

3月本学文学部中国文学科卒業。同47年3月大学院博士課程を単位取得満期退学後、母校に勤務。昭和50年4月専任講師、同57年助教、平成6年4月教授就任。中国文学科の教員として後進の指導に当られた。平成24年3月に定年退職され、同4月名誉教授の称号が授与された。

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

お詫びと訂正

前号（60号）の16頁「あの頃の就職部」文中にお名前の誤りがありました。訂正してお詫びいたします。
 誤）板東悦也 ↓ 正）板東説也

辻 隆敏	政 23	山根 雅彦	文 51
二口 信邦	文 37	蛭海 悠司	文 51
太田 慶子	文 42	宮森 庸子	文 56
實淨 俊郎	文 54	外池 奈保美	文 56
荒井 健司	文 60	中沼 美智子	文 57
佐藤 礼憲	文 63	青山 陽子	文 62
吹原 玲子	文 63	池谷 賢志	文 69
桑原 奈帆	文 71	高橋 妙子	文 71
森山 友美	文 73	中本 雄希	政 3
佐藤 優紀	政 11	福田 芳正	政 7
一 訓敏	文 41	杉山 朋秀	政 12
森 龍男	文 44	清水 公一	政 15
鈴木 明彦	文 44	石田 広	政 21
鉄尾 香陽子	文 48	大瀧 伸太郎	政 22

表紙写真

松苓会報の表紙の写真は、これまで、現在の二松學舎を見てもらおうと、建物の外観から内部の様子、そして夏目漱石アンドロイドにも登場願いました。今回は、一昨年、61号はこの写真にしたいと、お願いしていた新井喜義副会長の作品です。今後も、会員や学生の作品で表紙を飾られたらと思っています。

二松學舎
松苓会報
No.61

創刊 昭和62年12月1日
 発行 平成31年3月14日
 編集 二松學舎松苓会
 住所 〒102-8336
 東京都千代田区三番町 6-16
 電話 03-3261-7408 FAX 03-3261-8914
 振替口座 00180-5-160343（郵便局払込取扱票）
 印刷 ㈱サンセイ



編集後記

松苓会報61号をお届けします。卒業生みなさん、ご卒業おめでとうございます。次の号からは、新しい編集長に代わります。今回は、どうしても載せたい記事がありました。北から南からの「大星栄子さん突然のご逝去」という記事です。松苓会岩手県支部の支部報に載っていた宮本義孝先輩の記事です。みなさんに読んでいただきたくて、転載をお願いしました。

卒業生として松苓会活動に参加して、ご意見やご提案など賜れば幸いです。

二松學舎大学（松苓会）

ホームページ

松苓会 E-mail

www.nishogakusha-u.ac.jp

shourei@nishogakusha-u.ac.jp